

すぎなみコミュニティカレッジ講座記録

## 地域子育てサポーター養成講座

### 第7回「躰の原点を考える（江戸の躰）」

講師：江戸しぐさかたりべの会 つじかわまきこ 辻川牧子さん

開催日時：2005年1月20日（火）10：00～12：00

会場：あんさんぶる荻窪

主催：あすなる会

はじめに

おはようございます。「あすなる」のお仲間に入れていただいております、辻川牧子と申します。最初に皆さんにお断りしておかなければなりませんが、わたしは“かたりべ”でございます、学者ではございません。口伝として伝えられてきましたことを一所懸命にお話させていただきますので、よろしくお願い致します。

江戸しぐさ式にご挨拶しますと、この（現在）場合の挨拶は、「本日はお寒い中、お早々とお出ましいたきまして、誠に有り難く、御礼申し上げます」となります。いまは「ありがとうございます～す」なんて感じで、“ありがとう”が一人歩きしておりますが、元々“ありがとう”（有り難う）というのは“めったにない”という意味でございます、めったにないことをしてくださったあなたさまに御礼を申し上げます、それが“ありがとう”の江戸時代の形だったそうでございます。いま、わたしがご覧に入れた江戸式の正式の挨拶の仕方は、9歳から12歳の子どもがマスターしておかなければならなかった江戸の町民の躰のポイントだそうでございます。

ところで、「江戸しぐさ」という言葉をお聞きになられたことのある方は、いらっし

やいますでしょうか？（数人から手が挙がる） はい、ありがとうございました。最近、お目に届くようになりました。地下鉄の公共広告機構のポスターに使っていただいたり、NHKから取材をいただくなど、少しずつ取り上げてきていただいておりますが、江戸しぐさは、まったくの口伝、口承で伝わってきたもので、文章では残されていなかったものです。そういう特殊性がありますので、さきほどから“かたりべ”ということを強調させていただいているわけですが、その流れをちょっと聞いていただきますと、これからわたしがお話をさせていただく、江戸の町民の子育ての有り様をよく理解していただけるのではないかと思いますので、江戸の始まりのことからお話をさせていただきます。

### 江戸下町と江戸しぐさについて

ご存じのように、1590年、徳川家康は豊臣秀吉から、江戸・関東の土地250万国を所領として与えられています。そして1603年、江戸に幕府を開いたと、わたしたちは歴史の授業で学んできましたが、関ヶ原の戦いの後3年間、徳川家康が何をしていたかといいますと、特に幕府を開くために非常に時間をかけて都市計画を練ったそうです。今風に言いますと「プロジェクトX」のような巨大なプロジェクトが動き始めるのです。そして江戸を日本の総城下町、つまり日本の中心の城下町として機能する都市として作り上げようとした。資材だけでなくお侍さんや建設に従事する人たちの食料とか着るものを調達できないといけないわけですね。ですから武士だけでなく町人の力も重要視されたわけなんです。江戸の町をつくる時に、徳川家康が理想とした形というのは「水清く、入り江ありて、真魚（まな）豊か、四方（よも）見渡せる商いの町」というものです。水が清く量があること、飲み水はもちろんのこと、当時は水上交通が物資輸送の中心であることからきています。また“真魚豊か”の真魚というのは、真魚板の真魚で、食べ物が豊かであることを指します。そして四方にフラットに開けた美しい商いの町を、江戸の下町の理想像として掲げたといわれています。

日本の平和を守るための徳川幕府の象徴としての町、経済や食物で支える商人に対して4つの条件を出したといわれています。そこが、これからお話することで重要なポイントとなりますので、紹介しておきます。

- 1 商業についてはあくまで商人の自由に任せる、
- 2 江戸の中に商人のための土地（町地）を無償で与える、
- 3 そこから土地の所有税などはとらない、
- 4 行政は家臣団による上から統治ではなく町人の自治を認める。

こうした呼びかけに応じて千人もの優秀な商人たちが上方（関西地方）から江戸に参入してきたそうです。当時の江戸は何もない寂しいところで、人口も千人足らずであったという説もあるようですが、江戸幕府建設から100年も経つと一挙に百万人の人口を擁する都市になってきます。当時は正しい人口調査は実施されていませんので、あく

まで推測の域を出ませんが。人口の半分は武士、残り半分が町民であったと言われてい  
ます。江戸の土地のうち約7割が武士の住む土地で、1割5分が神社仏閣関連、残りが  
町民の土地といわれます。ということは、50~60万人の町民が、わずか江戸の16%程  
度の割合しかない狭い土地に暮らしていたわけです。そこに、江戸で一旗揚げようと、  
日本全国から人々が押し寄せました。各地のさまざまな風俗や言語が入れ乱れ、まるで  
外国のようなところだったといわれています。それこそ価値観も全く違う人たちがどん  
どん江戸に入ってきたわけです。しかも狭い土地ですから、どうしても摩擦が起きます。  
そうした摩擦を少しでも減らし、かに住みやすい町にするかが大きな課題になりました。  
当時は自治という言葉はなかったものの、自分たちの町は自分たちで守る、という  
強い意識がありましたので、町方の人口の8割を占めていた商業従事者が中心となり自  
分たちの商売も繁盛して、なおかつ住民同士が仲良く暮らせる町づくりを考えていった  
そうです。これが、これからお話をさせていただく“江戸しぐさ”の背景になる江戸の  
下町です。

非常に前置きが長くなりましたが、“江戸しぐさ”というものは単につきあいのルー  
ルとか言葉づかいといった小手先のことでなく、自分たちが住んでいる町が安全で住  
みやすくなるためにはどうしたらいいか、そういったことを考えてつくられていったも  
のなのです。

“江戸しぐさ”は「江戸思草」という字を充てます。“思う”は文字通り、思う、と  
か、考える、ということですね。“草”は「行動」、アクションのことです。どんなに頭  
で思っている、それが行動に表れなければ意味がないという、立体的な考え方をして  
いました。江戸しぐさは町民たちによって自然発生的に生まれてきたと、よく誤解され  
るのですが、そうではありません。当時の町のリーダー、今でいえば経団連とか経済同  
友会などに当たる大商人たちが中心になって考え、実践したものです。そして、それ  
を見た人たちが「ああ、これはいいなあ」という感じで広まっていったものだといわれ  
ています。その中心となる概念は、戦(いくさ)、いじめのない世の中をつくってゆくこ  
と、“共生”というのでしょうか、当時は共生という言葉はなかったそうですが、共倒  
れをしないという言葉をつかっていたようです。徳川家康の遺訓も「とにかく戦をする  
な」というもので、江戸を平和な町にするという強い願いがありました。

応仁の乱以来、ずっと戦が続いておりましたので、徳川家康をはじめとする武士たち  
だけでなく、町民や農民たちも強く平和を望んでいたと思われれます。戦といじめのない  
ようにやってゆこうという願いが時代を動かしていったのかもしれない。

江戸しぐさを中心になって考えていった人たちは“講”というものをつくっており  
ました。講といいますが、信仰関連とか、頼母子講などのような経済の講が知られてお  
りますが、その講ではなく、「江戸講」と呼ばれる相互扶助組織です。この講はだいた  
い月に2回ほど開かれていたそうです。そこで最初に話し合われる議題は、今江戸にと  
って何が必要か、何を改善すべきか、自分たちにとって一番重要な問題を話し合ったと

いわれています。その議題の後、子どもたちに具体的なしぐさなどを教えていたそうです。また、江戸講に入るといことは大変名誉なことであったそうです。周りから尊敬されたと聞いております。この講で、どうしたら自分たちが暮らしやすくなるか、商売が繁盛するかなど、お互いに真剣に話し合い、教え合っていたそうです。

しかし、この講は大きな力を持っていたがゆえに、明治の代になって政府から弾圧を受けることとなります。武士を凌ぎ、大名貸しをするほどの大きな経済力を持っておりましたし、結束も硬かったので、新政府にとっては危険な存在に感じられるものだったのかもしれませんが。廃仏毀釈と共に、明治になって江戸講は弾圧され、その後は形を変えて細々と続けられたそうです。それも昭和13年の国家総動員法で集会の禁止、そして戦争・・・で壊滅的な打撃を受けました。消えかかってしまった時に江戸講、縁のお家の出身でいらした江戸かたりべの会先代会長、芝三光(しば・みつあきら)氏が、戦後の荒廃した世の中のひとつの光になるのではと江戸しぐさの紹介と普及を始められました。

最初にも申しましたように、“江戸しぐさ”は口伝で残されてきたもので、文章にすると真意が伝わらないといわれていたものを、敢えて文章にしても、残していこうとされたのです。元々は“商人しぐさ”などと呼ばれていたものを芝先生が“江戸しぐさ”という言葉で残そうとされたわけです。そして、わたしの師の越川禮子(こしかわ・れいこ)が、芝先生の後を引き継いで現在に至っています。

大変前置きが長くなりましたが、お互いに江戸の町を良くしていこう、楽しく生きよう、そういうことを非常に身にしみて感じた人たちがつくってきたものであることを理解していただくと、これからお話する子育てに関することもよく分かっていただけるものと思います。

#### 江戸っ子とは

次に「江戸っ子」についてお話をします。江戸っ子と聞くと、よく「...てやんでい！」といった威勢の良い言葉を思い浮かべますし、わたしもそんなイメージを抱いていたのですが、テレビやドラマに出てくる江戸っ子は、本当の江戸っ子ではないそうです。レジュメにも書きましたが「互助の精神から生まれた江戸しぐさを身につけ、いきいきと明るく楽しく生きていこうとする人」が真の江戸っ子と呼ばれました。威張ったり、偉そうにする人は江戸っ子とは呼ばれなかったのです。そして、江戸っ子の最低の条件として次の4つがあげられています。

1. 目の前の人を仏の化身と思い、一期一会(いちごいちえ)の出会いを大切にする。
2. 時泥棒をしない。
3. 相手の肩書きを気にしない。
4. 遊び心を持っている。

二番目にあげました“時泥棒”というのは、たとえば、予約もせずに人のところに押

し掛けて行って勝手にふるまったりすると、相手の方は都合があったかもしれないわけですから、相手の時間を奪ってしまうことになる、そういうことをいいます。現在では電話がありますが、いきなり電話をして一方的に話をするのは“江戸しぐさ”に反します。「いま、お話をしても構いませんか？」と相手の都合を尋ねるとというのが“江戸しぐさ”に通じた方法です。江戸では、他家に嫁いだ自分の所の家を訪ねる場合でも、いつなら都合がよいか、小僧さんを走らせて確認してから訪ねたという話も残っています。物なら壊しても買って返すことができますが、時間は返すことができない、という発想で、非常に時間というものを大切にしたそうです。約束の時間を守ることも、人として大事なことと信じていたそうです。

四番目の“遊び心”というのは、暮らしを生き生きと楽しむ能力のことです。言葉遊びとか駄洒落なども楽しんでいました。

ここで一つのキーワードを紹介しましょう。『お心肥』と書いて「おしんこやし」といいます。これは心を豊かにする、教養を身につけるといったことです。ただし知識を詰め込むことは教養でも何でもなく、手足を動かし体験し、考え人格を豊かにするところまでを意味したそうです。子どもの時に勉強するのは当然で、いくつになっても自分を磨いていうことすることが大切であるとされました。

また、江戸で一番失礼な言葉は「そんな偉い方だとは存じませんで失礼しました」という言葉です。偉くなかったら何をしてもしよいか、という意味になりますから。

江戸時代には「土農工商」という身分制度がありましたが、江戸の町方はある意味で自由を与えられていましたし経済力もありましたので、町方同士は、仏様の前では平等、お互い互角という考え方が浸透していました。どんなに大店の、今でいえば会長さんや社長さんのような人でも、小僧さんが「おはようございます」と言ったら、必ず同格の言葉で「おはようございます」と返事を返したそうです。大店の主だからといって偉そうに「おはよう～」なんて言い方はしなかったそうです。また、荒い言葉をかけられた場合には、そういう言葉をかけられた自分を恥じたそうです。相手を責める前に、自分がそういう言葉をかけられる荒っぽい人間だと思われたことを恥じなさいと言われていました。

こういう話をしますと、一晩かかっても話し足りなくなるのですが、ここではポイントなる言葉についてだけお話をしておきましょう。

たとえば「人間」と書いて「じんかん」と読んでいました。人は一人では生きていけないものであり、お互い助け合って生きていくこと、人とのつきあいが非常に重要なものであることを思っていたのでしょうか。また、「心」というものを非常に大事にしていました。「忙(しい)」という字がありますね。これはりっしんべんですから、“心が亡い”という意味になります。ですから、「お忙しそうですね」と言われたら、自分が心のない人間だと思われたと感じて、顔を蒼くして怒ったそうです。また「忘(れる)」というのも同様に心がないという意味と、“迂闊”であることとして戒めていました。

## 江戸しぐさと子育て

ここから、やっと子育ての話題に入ります。

江戸時代では、知識を言葉で覚えさせるのではなく、また頭で覚えさせるのではなく、“見よう見真似”で学びとり、体で覚えさせるようにしていたそうです。現在でも「見取り図」という言葉がありますね。また「見習う」というのも江戸の養育法という言葉だそうです。現在では「教育」という言葉をよく使いますが、「養育」=養い育てる、とか、またもう少し子どもが大きくなりますと「鍛育(たんいく)」という言葉も使ったようです。そして、わたしが感心しましたのは、「説得」するのではなく「納得」させることを重視したということです。子どもたちが自発的に学んでゆくことを大切にしていたそうです。また、子育てではお母さんだけでなく、父親も積極的に関わって責任を果たしたそうです。家族ぐるみで、また近所も世間も参加して子どもを育てています。親が子どもに責任を持つことは当然ですが、世の中全体に自分たちが親だという意識があったようです。幕末から明治にかけて日本に来た外国人が、日本人はとても子どもをかわいがり、自分の子どもだけでなくよその子どももきちんと育てていることが強く印象に残ったと日記に記しています。江戸時代は、子どものいる人もいない人も、子どもを“世の中の宝”として大事育ててゆくことが自分たちの役目だという意識を強く持っていたようです。

江戸の商家の子どもの段階的養育法を伝えた言葉に「三<sup>み</sup>つ心(こころ)・六<sup>む</sup>つ躰(しつけ)・九つ言葉・十二文(ふみ)・十五理(ことわり)で未決まる」があります。“三つ心”ですが、商家の親たちは、まず健康に育つことを願いながら、子どもが3歳になるまでに心の糸をしっかりと結ぶことに力を入れました。江戸の人々は、人間は「脳と体と心」3つからなっていて、それを心の糸がつないでいると考えていました。言葉も行動もあやつり人形のように心の糸によってコントロールされており、心がなければ木偶(人形)と同じだというわけです。比喻ですが、赤ちゃんが生まれたら親は1日1本のつもりで丁寧に、蜘蛛の糸のように3歳になるところまでに約1000本の心の糸を張ってあげなければならないとされていました。「子は親の言うとおりににはならない。親のしたとおりになる。」という諺にもあるように、折にふれ自らが手本となって繰り返し見せたそうです。

“六つ躰”ですが、これは6歳ぐらいまでにトレーニングしてきたことが身体技法(身のこなし)として自然に表に出てくるようにしつけるという意味です。また、“九つ言葉”というのは、9歳ぐらいまでに「おはようございます」といった挨拶の後に「世辞(せじ)」が言えることを指します。世辞というのは、おべんちゃらではありません。「おはようございます」の後に「今日は良いお天気でございますね」といった挨拶の後

につける大人の言葉です。挨拶の後にちょっとした言葉をつけてお互い気持ちよくコミュニケーションできるレベルまで教えていこうという段階なんです。言葉に関しては、江戸の人々は非常に神経を遣っていました。とても厳密で丁寧で、正確さを追及しています。「です」という言葉がありますよね。侠客が使った「でんす」からきた言葉で乱暴な言葉とされていたそうです。通常は「そのようでございます」とか「さようございます」と言いました。それも、「...だそうでございます」の場合は人から聞いた話、自分で調べた話は「...のようでございます」と厳密に使い分けをしていました。言葉には言霊が宿るとして、たとえ口から出たものであっても、証文などと同じくらいの重みがあるものとししました。ですから、江戸では、子どもたちが「指きりげんまん、ウソついたら針千本飲～ます」と言った後に「死んだら御免」というのを付けたそうです。その約束を破っていいのは死んだ時だけなのです。そのくらい口から出任せということを許さなかったということです。

商人たちの言葉は非常に丁寧で、子どもの時から正確な言葉遣いをしていたそうです。

次に“十二文”ですが、商家ですから、12歳ぐらいまでに納品書、請求書が書けるのは当たり前、苦情処理書までまがりなりにも書けるようにしたそうです。その背景には、主(あるじ)が亡くなっても、商売や家が困らないようにという配慮もあったと思います。

また“十五理”ですが、武士も15歳くらいで元服して大人の仲間入りをしますが、15歳くらいで理屈を暗記でなく理解し、実感としてとらえることができるようにしたと言われています。世の中の動きとか自然の理解といった大きなものに対して、自分のなりに想像し考え、行動してゆける判断力を持たせるという、高い目標があったようです。

さて、レジュメに書いておきましたが「いきの祝い」というものがあります。子どもが熱い物を食べる時に自分から「あっち！」と言えるようになった時に「いきの祝い」というお祝いをしたそうです。熱いということを前もって予測できて、さますという行動ができたということは、自立の第一歩ということで、親はとても喜んだそうです。ついでに“いき”ということでお話をしますと、いまは「粋」という字を当てますが、江戸でいう“いき”というのは「生き活きと生きる」の“いき”とか、「心意気」とか「息が合う」の“いき”だそうです。上方では「粋」を「すい」とか言うそうですが、江戸で言う粋とは着物の柄が良いとかいう意味のレベルのことではなく、江戸のためになることを“いき”、江戸のためにならないことを“野暮”と言っていたそうです。

また、「上品」「中品」「下品」というものがあり、それぞれ「じょうぼん」「ちゅうぼん」「げぼん」といいます。人は生まれて来るときは皆「下品(げぼん)」だそうです。「下品」で生まれてきて、一所懸命に自分を磨いて「中品」になり、江戸講の講師さまのような「上品」な人になるのが理想だったそうです。「下品」というのは「おいしいものが食べたいなあ」というレベルです。「中品」は「短歌などの歌が詠みたいなあ」

というレベル、「上品」は「人さまのためになることをしたいなあ」という、人を教えるとか助けるというレベルに達しているということだそうです。生まれてきた子どもはお父さんに「中品」の姿を見、おじいさんに「上品」の姿を見るといわれ、三代かかるというわけです。ここから“江戸っ子は三代”という言葉が出たのかもしれませんが、それくらい時間のかかるということだったのです。これは“江戸しぐさ”ではないのですが、現在では生涯学習という言葉がありますが、そこにつながっています。欧米諸国では、勉強することは(資格を取ることも含めて)自分の社会的な地位を上げるとか収入を増加させる手段という発想がありますが、日本の場合には江戸時代から、上品を目指す、それによって収入が増えるわけでも社会的な地位が上がるわけでもありませんが、自分を高めていこうという生涯学習のような気概があったことを、外国の学者が驚きを持って書いています。江戸時代の商家の女性の例で、月に12回くらい、現代でいうカルチャースクールのようなところ、たとえば短歌の会や勉強会などに行っているという話が残っています。もちろんそれだけの余裕があったこともありますが、それだけ熱心に勉学に励んでいたということですね。

また、よく誤解されていますが、江戸の町方の女性の地位は決して低くはありませんでした。店の女主として立派にやっている人も多くいましたし、財産もあるということで、地位は低くなかったのです。離婚に関しても、よく知られた「三行半」というものがありますが、あれがないと再婚できないので、女性の方から男性に書かせる例もあったようです。虐げられて台所の隅で泣いているとか、そういうことは少なかったようです。また、料理の上手な人は非常に評価されました。上手な人は安い素材でもおいしい料理を作れますし、下手な人は良い素材を使ってもまずい料理しか作れません。料理上手の奥さんを持つ旦那さんはとても鼻が高かったそうです。

あるいは、江戸での女性のほめ言葉でいいますと、江戸では女性を評価する際に、見目形(みめかたち)だけではなく、気働きができるとか、よく心遣いができるということが大事なポイントで、見目形でほめるのは下品であったそうです。農村なら体力も重要でしょうが、江戸では中高年になっても、お客さまに対して良い対応ができれば十分に通用したそうです。声色も、甲高い声で話すのではなく、落ち着いたアルトの声で話すようにしていたそうです。江戸の三代美女といって、よく浮世絵などで紹介されていますが、その一人の“笠森於仙(かさもりおせん) = 江戸時代に美人で評判になった茶屋の娘”は、美人でもあったようですが、非常にお客さまの対応が上手だったようです。さまざまなお客さまに合わせて対応し、その対応ぶりが気持ちよいというので多くの客が押し寄せたといわれています。そういう意味では、当時は“おとなの社会”というか成熟することに対して自らも努力したし、またそういうものに大きな価値を置いていたといえると思います。子どもの教育にしても、ただ学問ができるということよりも、世の中のどんな人とでも上手につきあってゆけるといったことを重視したように感じます。



続きまして「往来（おうらい）しぐさ」というお話をさせていただきます。

江戸の往来というのは“公道”であり、子どもたちには、“お城に続くお廊下”であると教えていたそうです。そこに唾を吐くなんて、とても考えられないことで、道は美しく保たれていたそうです。ですから、我が物顔に自分勝手に振る舞うことも恥ずかしいことでした。大人たちは、往来でのしぐさを徹底して教え込むことで子どもたちに社会性を持たせようとしたようです。

往来しぐさと呼ばれるものにはいろいろありますが、たとえば「うかつあやまり」というものがあります。これはうっかり人の足を踏みつけてしまった時に踏みつけた方が謝りますが、踏まれた方も、「わたしも迂闊でした」と返したそうです。そうすることで気まずさが解消され、お互い和やかな気持ちになれますね。ところで、わたしが今ここでお話をしているのは、見ず知らずの人に対してのものです。現代の私たちでもよく知っている相手に対してはきちんと挨拶したり親切にふるまいますが、ここでのポイントは見ず知らずの相手に対しての行為であるということです。なぜなら、町も道もみんなが共有しているものだからです。そこですれ違った見ず知らずの人も大切な人という発想です。また「会釈」というものがあります。これは、人と会ったときに「ふっと優しい目、慈しみの眼差しをしなさい」ということです。言葉で説明するのが難しいのですが、大げさに挨拶するのではなく、ちょっとにっこりする...という感じでしょうか。わたしたち日本人は最近やらなくなりましたが、これは、実は世界中でやっていることではないでしょうか。外国に行きますと、見ず知らずの相手であっても、すれ違う時などに、軽くにっこりするようなことを惜しまずにしますよね。これは、一瞬です、いわば瞬間芸です。また、「体談」といいます、ボディランゲージでもって、一瞬のうちに自分の気持ちを相手に伝えるものです。お互いがんばりましょうね、とか、今日は良いお天気ですね。といったことを、言葉ではなく、一瞬の目つきとか動作でもって、つまり、しぐさで表現するわけですね。これを子どものころから、癖になるくらいに身につけたそうです。もう、歯磨きしないと気持ち悪いというのと同じ程度まで身に染み込ませたといえます。

「蟹歩き」というのは、読んで字のごとく、蟹のように横に歩くことを指します。狭い往来で人とすれ違う時のしぐさですが、商人だけに合理的です。一瞬たりとも止まっていないのです。実は、戦前の小学校で雨の日の体育の時間に練習させていたと聞いたことがあります。わたしの師がこの話をいたします、そういえば、戦前にやった記憶があるとか、お母さんやお父さん、おじいさんやおばあさんに聞いたことがあるという方がいらっしゃるそうです。江戸といっても、曾おじいさん、曾おばあさんの時代ですから、そんなに昔の話ではないのですね。

「七三（しちさん）の道」というのは、七つは公道で、残り三つが自分たちの道であるという考え方です。公道というのは、何か災害があつたり急病人が出た場合に使うので、すべてを自分たちで使うようなことはいけないと戒めていたそうです。

また、「無悲鳴（むひめい）のしぐさ」というのがありまして、これは完璧な危機管理だと思います。地震とか火災が発生した際に、女性の悲鳴がパニックを起こす要因になるので危険だというものです。これは当時の人たちがたびたび経験していたらしく、子どものころから、何かあっても女性は「キャー」と叫んではいけないと教えていたそうです。危機管理の話が出たのでついでにお話をしますと、江戸は非常に火事が多く発生しています。なにせ木造家屋が密生していますから、よく大火があり、10年に一度は焼け出されるというくらいだったそうです。火事を防ぐために上野広小路などの火よけ地を設けたり、町火消しという組織がつくられたり、「火の用心」の見回りもありました。銭湯も風の強い日は営業しなかったそうです。また、現在では理容院は月曜日定休のところが多いというように、同業者が一斉に休みますが、江戸では、交代で休んだそうです。そうすれば一軒の店が休んでも他のどこかの店が営業していますので困りません。非常に利用者本位に考えていたわけですね。話がずれてしまいましたが、ついでにもうひとつ、かつて三波春夫さんが「お客さまは神さまです」とおっしゃいましたが、“江戸しぐさ”では、「お客さまも人間です」になります。自分たちと同じ人間ですから、自分たちがイヤなことは相手にしません。反対に、自分がされたらうれしいことを相手にしてさしあげる、人間として尊重するという発想です。当時の身分制度である“士農工商”からいえば一番下の存在ですが、町方の世界の下町ですから卑屈になることなく、お客さまに胸を張って出せるものを提供しようという心意気があったと思います。

わたしたちは、人に謝る際に「すみません」と言いますね。江戸では、「澄みません」という文字を充てました。“心が澄んでいない”という意味です。こんなことをして、心がぐちゃぐちゃになってしまった、心が澄んでいない自分が恥ずかしいという思いを込めたものです。

また、「江戸の地震はナマズの天地返し」という言葉があり、「ナマス講」という組織をつくっていたそうです。これは現在のボランティアに相当します。何か災害があった時に、幕府や公的な機関が助けてくれるわけではない。イザという時には、自分たちの身は自分たちで守ろうというためのものだったそうです。

ついで言いますと、「地震、雷、火事、おやじ」という言葉があり、現在では怖いものを順に並べたもののように思われています。しかし、江戸では、地震と雷が発生した際には一番火事を注意しろ、という意味でいわれました。“おやじ”というのは筆頭という意味で使われていました。「ねじり棒」という、非常食がありました。お米を蒸してねじり棒にしたものを乾燥させても着物の襟に縫いこんでいたそうです。イザというときの非常食で、大人用と子ども用があったそうです。

この「ねじり棒」は明治を過ぎ、大正を過ぎ、昭和に至るまで味が変わらなかったといえます。自分たちでできる（準備）ことは徹底してやっておいて、後は楽しく暮らしましょうという心がけだったようです。

ここで、「あすなるの会」の方々に、往来しぐさの「肩引き」「傘かしげ」「こぶし腰

浮かせ」というのを実演していただきます。これらは、「稚児しぐさ」とか「お初しぐさ」とか呼ばれ、3歳から9歳までに間にしっかり身につけておかなければならないしぐさでした。

最初に「肩引き」です。狭い道ですれ違う際に、お互い右の肩を少し引き、ちょっと顔を合わせるような形をとります。その際に、さきほど紹介しました“会釈(慈しみの眼差し)”が出てくるとなおいですね。

この「肩引き」が変形したものが「傘かしげ」です。これは、傘を相手の方にかけていないというもので、お互いが濡れないための工夫ですね。お互いに右の肩の後方に傘を引けばよいのです。こうすれば、細い道でも、お互い濡れないで済みますね。

「こぶし腰浮かせ」というのは、乗合船などに同席した際に、こぶし一つ分だけ腰を上げて席を詰め次に来た方に席をあけてあげるというものです。

## 江戸寺子屋

今度は「江戸寺子屋」のお話をいたします。これは、商家が自分たちの子どものためにお金を出し合って師匠を雇っていた、公塾のような性格を持っていたものです。幕府のからも助成金が出ており、儒学伝習所という名前をもらっていたそうです。ここでは、入りたい人には広く門戸を開けており、商売の景気が悪くなって学費が払えなくなった場合でも追い出すようなことはなく、師匠の裁量できちんと卒業するまで面倒を見たようです。また、それを批判する親御さんはいなかったそうです。

江戸の人たちは子どもたちが自分たちの次の世代を担うことを非常に重く考えていたようで、お子さんがいない家でも寄付金を出した例も多くあったそうです。

寺子屋は、よく「読み、書き、そろばん」といいますが、江戸寺子屋では、さらにその上に「見る、聞く、話す」に重点を置いて教育していました。たとえ親がいなくなっても、何とか一人で生きていけるような人間を育てようとしたようで、そのためには人から言われたことをそのままやっていたのではダメで、どんな状況に置かれても、自分の目で見て判断して、自分で対策を講じられるようにするというところに力を入れていました。それを“実学”と呼んでいます。今でいう実用のためではなく、それもありますが、森羅万象、災害のことや自然の摂理までも、自分の感覚でとらえたり、判断する、あるいは洞察力といいますか、人を見る目を養うといったことまで含みます。江戸っ子の条件として「相手の肩書きを気にしない」ということを挙げましたが、これは肩書きで相手を見ないということです。肩書きなどの色眼鏡を一切取り払った上で、その人はどういう人かを自分の責任でもって見ていく力を身につけていくことを非常に重要視しています。先ほども、教育という言葉は使われなかったと言いましたが、教育という言葉には先生が教えるという上下の関係が生まれますから、いつまでも上の人を頼っているようでは、一人で強く生きていくことができないという考え方があったのだと思います。自発的に判断し、自発的に行動していけるような人間を育てることに重点を置い

ていたということですね。

考えることを重視した教育ということであれば、実際の授業では、立場を変えて考えるロールプレイングとか、ブレインストーミングなども行われていたようです。文字で書いて覚えることは全体の1割に過ぎず、後の9割は実際の世の中から学ぶという教育方針でした。考える力だけでなく、人の気持ちを思いやるとか、想像力を養うことも重視したそうです。

余談になりますが、江戸には物売りが多くいました。町中で売り声をかけながら商売しましたが、病人のいる家の前には「病人がいます」という印があり、そこを通る際には売り声を出さずに通り過ぎたそうです。それくらい、相手を思いやる精神が社会に浸透していましたから、寺子屋の中でも、知識が多いことがそれほど重要ではなかったのです。何よりもまず思いやりの精神がなければならず、頭でっかちは評価の対象にはなりませんでした。

レジュメに「六月六日の入門日」と書いておきました。六歳の六月六日に寺子屋に入門するわけですが、ちなみに今年2005年の6月6日は7月11日にあたります。結構暑い時期ですね。この日、お母さまに連れられて寺子屋に行き、お師匠さまの話を一時（いっとき・現在の2時間）も聞くわけです。江戸の一時は昼間の時間を割ったものですから、夏至の頃の一時は2時間6分くらいありますが、冬至になると1時間30何分とか短くなります。いずれにしても、6歳の子どもにとっては長い時間ですが、その一時をとにかくじっとして話を聞くことが入門の条件、資格だったそうです。これを聞いて、わたしはびっくりしました。自分自身も無理ですし、うちの子どもなんかとてもとても...

でも、そういう話をしますと、江戸の子どもたちはかなり立派に聞こえますが、何ごとも今と比べてのんびりしていたようで、あまり成績にはこだわらずに育てられたようです。寺子屋の師匠の条件というのが、生徒を見る力、生徒一人一人の得手不得手を把握し、適材適所を判断できるかどうかにあったそうです。また、寺子屋にはそこで学んだ若い助手もいました。学ぶということは、師匠だけでなく、そういうちょっと年上のお兄さんやお姉さんたちを“見習う”、見て取っていく、学ぶは“まねぶ”、“いいなあ”と思う見本を見て、自分もそうなりたいと願ってやっていくことだったのです。江戸時代のお手本は大人たちであり、教科書というのは目の前の生きた人たちであったわけですね。その分だけ大人たちは頑張らなければならなかったとも言えますね。

寺子屋で、子どもたちはただ知識を学ぶだけでなく、お菓子の食べ方、お茶の飲み方、あるいは先ほどお話をしましたしぐさ、また災害時の対応の仕方まで学びました。また、わたしが素晴らしいと思ったのは、「この地球に生きるすべての生きとし生けるものにはすべて相関作用がある」といって、世の中はすべてつながっていることを教えたということでした。

当時の日本は鎖国をしておりましたが、海外からは多くの知識が入り込んでいました。

そういった新しい海外の知識もどん欲に吸収していたようで、江戸時代には地球という存在も分かっていたといえます。幕末にはバウムクーヘンまで食していたとか…。脱線ついでに言いますと、たとえばパリで万国博覧会が開かれたとき、会場にエレベーターが登場して注目を集めていますが、そこを訪れた日本人で、地方の人は初めて見るので驚いたそうですが、江戸の人はエレベーターそのものはなかったでしょうが、その理論応用したものがあったので全然驚かなかったそうです。あるいは、現在 100 円ショップがありますが、“38 文ショップ”なるものはあったそうです。考えることは今も昔もあまり変わらぬものですね。

また話が飛んでしまいました。次の「朝顔に つるべとられて もらい水」ですが、これは学校では、加賀千代女（かがのちよじょ）の有名な句で、千代女の朝顔へ寄せる女性らしい思いやりがよくあらわれている句だと教えられた記憶がありますね。しかし、江戸寺子屋では、これはいわば戒めの教材として教えられていました。朝顔というのは、放っておくとツルが伸びるものであるから、そのツルが伸びるのを迂闊にも予測していなかったのは不注意である、というのです。そして、伸びたツルをはずしてしまうと朝顔は枯れてしまいますから、良くないというのです。特に江戸には「草主人従（そうしゅじんじゅう）」という言葉があります。“草”は自然を指し、自然が主で、人間はあくまでその下にあるものだという考え方です。自然に対する畏敬の念を持っていないといけないというわけです。さらに、当時水は非常に貴重なものです。水売りがいたくらいですから、水を人からもらうというような人に借りをつくるようなことをしてはいけない、という意味もあります。さらに、借りたものは必ず返さなければなりません。それらのことをこの一つの句で教えていたそうです。

おわりに

急ぎ足で、江戸町方の子育てをおはなしさせていただきました。10年前から、越川先生より“江戸しぐさ”を少しずつご指導して頂いて参りましたがまだまだわからないことだらけでございます。本日は、未熟なかたりべの私の拙いおはなしに皆様おつきあいくださしましてありがとうございます。本当にありがたく御礼申します。

< 参考資料 >

藤井康男著「江戸あきんどの知恵袋」(大和出版刊)

鈴木理生著「家主さんの大誤算」(三省堂刊)

越川禮子著「江戸の繁盛しぐさ」(日本経済社刊)「商人道・江戸しぐさの智恵袋」(講談社刊)「身につけよう!江戸しぐさ」(KKロングセラーズ刊)